

しんぱん しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいよんしょう ぶつぽう しゃかい
第四章 仏法と社会

ふじん しんこう
婦人と信仰

矢 走
やのはしることは弓のちから、くものゆくことはりゅうの
力 夫 仕 業 妻 力
ちから、おとこのしわざはめのちからなり。

（ときあまごぜんごへんじ）
134 富木尼御前御返事

婦人 信仰 1316 ページ 7 行
ふじん しんこう

や はし ゆみ ちから
矢が走るのは弓の力によります。雲が流れていくのは竜の力
くも なが りゅう ちから
によるといわれています。それと同じように、夫の働きは妻の
ちから
力によってきまるのです。

煙 見 ひ
けぶりをみれば火をみる。あめをみればりゅうをみる。
夫 妻
おとこを見ればめをみる。いま富木殿 見 参 仕
今ときどのにげんざんつかまつ

れば、尼あまごぜんを見みたてまつるとお覚ぼう。

134 富木尼御前御返事 ときあまごぜんごへんじ

婦人ふじんと信仰しんこう

1316 ページ 8 行

いま むかし
今も昔も、
しょうにん
聖人も凡夫も、
だいいち
人の中をたがえること、
ひと なか 違
人によにん
女人
よりして起^おこりたる第一のあだにてはんべるなり。

164 法蓮抄
ほうれんしょう

ふじん しんこう
婦人と信仰
1412 ページ 17 行

女にょ人にんとなることは、物ものに随したがつて物ものを随したがえる身みなり。

171 兄きょう弟だい抄しょう

婦ふ人じんと信しん仰こう
1480 ページー11行

女じょ性せいというのものは物ものにしたがって、物ものをしたがえる身みです。

ひよく　もう　とり　み　ひと　かしらふた　ふた　くち
比翼と申す鳥は、身は一つにて頭二つあり。二つの口よ
い　もの　いっしん　やしな　比　目　もう　うお　いちもく
り入る物、一身を養う。ひぼくと申す魚は、一目ずつあ
ゆえ　いっしょう　あいだ　離　おとこ　め
る故に、一生が間はなるることなし。夫と妻とは、か
くのごとし。この法門のゆえには、たとい夫に害せらる
く　いちどう　おとこ　こころ　諫
るとも、悔ゆることなかれ。一同して夫の心をいさめ
りゆうによ　あと　繼　まつだいあくせ　によにん　じょうぶつ　てほん　な
ば、竜女が跡をつぎ、末代悪世の女人の成仏の手本と成
り給うべし。　たも　きようだいしろう

(171 兄弟抄

ひよく

とり

み ひと

あたま ふた

ふた

くち

比翼という鳥は、身は一つで、頭が二つあり、二つの口から

べつべつはい

しよくもつ

おな ひと

み やしな

ひもく

さかな

別々入った食物が、同じ一つの身を養います。比目という魚

ひもくぎよ

しゆう ひとめ

いっしよう あいだはな

（比目魚）は、雌雄に一目ずつあるために一生の間離れることが

おつと つま

ほうもん

ありません。夫と妻とは、このようなものなのです。この法門

ごほんぞん

おつと ころ

（御本尊）のためには、たとえば夫から殺されるようなことがあつて

こうかい

ふじん

ちから あ

おつと

しんじん いさ

も後悔してはなりません。夫人たちが力を合わせて夫の信心を諫

りゆうによ

あと

つ

まつぼうあくせ

によにんじようぶつ

てほん

めるならば、竜女の跡を継ぎ、末法悪世に女人成仏の手本とな

られることでありましょう。

はかばかしき下人げにんもなきに、かかる乱れたる世よにこのとの殿
をつかわされたる心ざし、遣
大地よりもあつし。厚 地神定め
てしりぬらん。知

（193 同生同名御書 どうしやうどうみやうごしよ）

婦人ふじんと信仰しんこう
1519 ページー5 行

禍

さんによ

起

さだ

そうろう

わざわざ三女よりおこれりと定められて候に、この

ほけきよう

きよう

たも

によにん

いつさい

によにん

過

法華経ばかりに、この経を持つ女人は一切の女人にすぎ

いつさい

なんし

超

そうろう

たるのみならず、一切の男子にこえたりとみえて候。

しじようきんごどののにようぼうごへんじ

(198 四条金吾殿女房御返事

ふじん

しんこう

婦人と信仰

1542

ページー12行)

こだいちゆうごくしゃかい

こんらん

さんにん

あくじよ

げんいん

お

古代中国 社会の混乱は三人の悪女が原因で起こったことが

ていせつ

ほけきよう

きよう

じゆじ

定説とされていますが、この法華経においては、この経を受持する

じよせい

ほか

じよせい

だんせい

女性は、他のあらゆる女性にすぐれるだけでなく、すべての男性に

こ

と

も超えていると、説かれているのです。

左衛門殿

ぞく

にほん

肩

しかるに、さえもんどのは、俗のなかには、日本にかたを

並

者

ほけきよう

しんじや

相連

ならぶべきものもなき法華経の信者なり。これにあいつれ

たま

にほんだいいち

によにん

させ給いぬるは、日本第一の女人なり。

しじようきんごどののにようぼうごへんじ

198 四条金吾殿女房御返事

ふじん

しんこう

婦人と信仰

1543

ページー10行

にほんこく もう によにん くに もう くに
日本国と申すは女人の国と申す国なり。

216 日眼女造立釈迦仏供養事
にちげんによぞうりゆうしやかぶつくようじ

ふじん しんこう
婦人と信仰
1611 ページ 13 行

によにん

おとこ

たましい

おとこ

によにんたましい

女人は夫を魂とす。

夫なければ、女人魂なし。この

よ おとこ

によにん

よ なかわた

難

見

そうろう

世に夫ある女人すら、世の中渡りがとうみえて候に、

たましい

よ わた

たも

たましい

によにん

勝

魂もなくして世を渡らせ給うが、魂ある女人にもすぐ

しんちゆう

うえ

たましい

こころ

い

れて心中かいがいしくおわする上、神にも心を入れ、

ほとけ

崇

たま

ひと

すぐ

によにん

仏をもあがめさせ給えば、人に勝れておわする女人な

り。

(242 乙御前御消息

おとごぜんごしようにそく

ふじん

しんこう

婦人と信仰

1688

ページー14行)

おっと

み

じよせい

おっと

たましい

おっと

(夫のある身の) 女性は夫を魂とするのです。夫がいなけ

じよせい たましい

おな

よ おつと

によにん

れば女性の 魂 はないのと同じです。この世に夫のある女人でさ

よ なか わた

おも

たましい たの おつと

よ

え世の中を渡りがたいと思われるのに、 魂 と頼む 夫 もなくて世

わた

おつと

じよせい

すぐ

こころ

を渡られているあなたが、 夫 のある女性にも勝れてお心もしつか

しよてんぜんじん

かご

しん

ほとけ

とうと

りたもたれておられるうえ、 諸天善神の加護をも信じ、 仏をも尊

とうぜん

ひと

すぐ

じよせい

ばれておられるということは、 当然、 人よりも勝れた女性なので

す。

おとし

たも

ほけきよう

敵

いかなる男をせさせ給うとも、法華経のかたきならば、

したが たも

随い給うべからず。

ごうじよう おんごころざし

いよいよ強盛の御志 あるべし。

おとしごぜんごししようそく

(242 乙御前御消息

ふじん しんこう

婦人と信仰 1690 ページー12行)

だんせい おつと

ほけきよう てきたい

どのような男性を夫とされても、法華経に敵対するならばしたが

つよ しんじん つらぬ

つてはいけません。ますます強い信心を貫いていきなさい。

によにん みず

器 もの

によにん や

女人は水のごとし、うつわ物にしたがう。女人は矢のごと

ゆみ 番

によにん 舟

楫 任

し、弓につがわさる。女人はふねのごとし、かじのまかす

によにん 夫 盗 びと

るによるべし。しかるに、女人は、おとこぬす人なれば

によにん びと

おう によにん 后

女人ぬす人となる。おとこ王なれば女人きさきとなる。お

ぜんにん によにんほとけ

こんじよう ごしよう

とこ善人なれば女人仏になる。今生のみならず、後生も

おとこによるなり。

（249 棧敷女房御返事（無量無辺の功德の事）

さじきのようぼうごへんじ むりようむへん くどく こと

婦人と信仰 1704 ページ 6 行

ふじん しんこう

じよせい みず みず うつわ かたち すなお したが

女性 は 水 に た と え る こ と が で き ま す 。 水 は 器 の 形 に 素 直 に 従

じよせい や

や ゆみ

つていきます。また、女性じよせいは矢やのようなものです。矢は弓ゆみにつがえら

と

じよせい ふね

ふね かじ と

れて飛ぶのです。また、女性じよせいは船ふねのようなものです。船は楫かじの取り

ぐあい

ほうこう すす

じよせい

具合ぐあいによつて、どちらの方向ほうこうにも進むのです。そのため、女性じよせいはそ

おつと ぬすびと

つま ぬすびと

おつと おう つま

の夫おつとが盗人ぬすびとであれば、妻つまも盗人ぬすびととなり、夫おつとが王おうであれば妻つまは

おうひ

おつと しょうほう

ぜんにん つま ほとけ

王妃おうひとなるのです。夫おつとが正法しょうほうをたもつ善人ぜんにんであれば、妻つまも仏ほとけに

こんぜ

ごしょう おつと

なることができます。今世こんぜだけでなく後生ごしょうも夫おつとによるのです。

い ぶんえいじゅういちねん ことしこうあんがんねん

去ぬる文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年

あいだ さんちゅう そうろう さどのくに さんど おとこ 遣

が間この山中に候に、佐渡国より二度まで夫をつか

おんこころ だいち 厚

わす。いくらほどの御心ざしぞ。大地よりもあつく、

たいかい 深 おんこころ

大海よりもふかき御心ざしぞかし。

せんにちあまごぜんごへんじ しんじつほうおんぎよう こと

(265 千日尼御前御返事 (真実報恩経の事))

ふじん しんこう

婦人と信仰

1742 ページ 4 行

ほけきよう ししおう たも によにん いっさい じごく がき ちくしよう
法華經の師子王を持つ女人は、一切の地獄・餓鬼・畜生
とう ひやくじゆう おそ
等の百獸に恐るることなし。

266 千日尼御前御返事（雷門鼓御書）
せんにあまごぜんごへんじ らいもんのつづみごしよ

ふじん しんこう
婦人と信仰 1745 ページ 9 行

さどのくに

くに

さんかい

へだ

せんり

およ

そうろう

佐渡国よりこの国までは山海を隔てて千里に及び候に、

によにん

おんみ

ほけきよう

こころざ

ねんねん

女人の御身として法華経を志しましますによりて、年々

おとこ

おんつか

おんとぶら

さだ

ほけきよう

しやか

に夫を御使いとして御訪いあり。定めて法華経・釈迦・

たほう

じつぼう

しよぶつ

みこころ

知

多宝・十方の諸仏、その御心をしろしめすらん。

たと

てんげつ

しまんゆじゆん

だいち

いけ

しゆゆ

譬えば、天月は四万由旬なれども、大地の池には須臾に

かげう

らいもん

つづみ

せんまんりとお

う

しゆゆ

影浮かび、雷門の鼓は千万里遠けれども、打てば須臾に

き

おんみ

さどのくに

こころ

くに

きた

聞こゆ。御身は佐渡国におわせども、心はこの国に来れ

ほとけ

なみち

われ

えど

そうら

り。仏に成る道もかくのごとし。我らは穢土に候えど

こころ

りようぜん

す

おんかお

み

何

も、心は靈山に住むべし。御面を見てはなにかせん、

こころ たいせつ そうつら

心こそ大切に候え。

しゃかぶつ

りようぜんえじよう

参

いつかいつか、釈迦仏のおわします靈山会上にまいり

そうつら

あい候わん。

(266 千日尼御前御返事 (雷門鼓御書)

せんにちあまごぜんごへんじ

らいもんのつづみごしよ

ふじん しんこう

婦人と信仰

1746

ページー1行)

おとこははしらのごとし、女はなかわのごとし。おとこは

あし によにん み

足のごとし、女人は身のごとし。おとこは羽のごとし、

おんな 身 はね 身 別 々 何

女はみのごとし。羽とみとべちべちになりなば、なにを

飛 倒 桁 ち お

もってかとおぶべき。はしらたおれなば、なかわ地に堕ちな

家 夫 ひと 魂

ん。いえにおとこなければ、人のたましいなきがごとし。

せんにちあまごへんじ

(268 千日尼御返事

ふじん しんこう

婦人と信仰 1750 ページ 14 行)

おとこ はしら おんな なかわ いえ はし はしら うえ

男は柱のようなものであり、女は桁 (家や橋などの柱の上

わた う ざいもく おとこ あし

に渡して、たるきを受ける材木のこと) のようなものです。男は足

おんな み

おとこ はね

のようなものであり、女は身のようなものです。男は羽のような

おんな み

はね み べつべつ

ものであり、女は身のようなものです。羽と身とが別々になったら

と

はしら たお

なかわ

どうして飛ぶことができるでしょうか。柱が倒れたならば、桁は

ち お

いえ おとこ

ひと たましい

地に落ちてしまいます。家に男がいなければ、人に魂がないよう

なものです。

佐 渡 くに そら

ときごしんよう

不思議 覚

さどの国に候いし時御信用ありしだにもふしぎにおぼえ

そら

にゆうどうどの 遣

おんこころ

候いしに、これまで入道殿をつかわされし御心ざし、

くに 隔

ねんげつ 重

そら

弛

みこころ

また国もへだたり、年月もかさなり候えば、たゆむ御心

疑

そら

色

顕

功

もやとうたがい候に、いよいよいろをあらわし、こうを

積

たも

いっしょうにしよう

つませ給うこと、ただ一生二生のことにはあらざるか。

こうのにゆうどうどのへんじ

270 国府入道殿御返事

ふじん しんこう

婦人と信仰

1756

ページー14行

しようじようせぜ

あいだ

契

おとこ

たいかい

砂

数

生々世々の間、ちぎりし夫は大海のいさごのかずより

多

そうら

こんど

契

もおおくこそおわしまし候いけん。今度のちぎりこそ

真

夫

故

夫

勸

まことのちぎりのおとこよ。そのゆえは、おとこのすすめ

ほけきよう

ぎようじや

たま

ほとけ

拝

たも

によりて法華經の行者とならせ給えば、仏とおがませ給

うべし。

(297 上野殿後家尼御返事

うえのどののごけあまごへんじ

ふじん

しんこう

婦人と信仰

1832

ページー12行)

そ みず かんつ こおり ゆき としかさ すいしよう

夫れ、水は寒積もれば氷となる、雪は年累なつて水精と

あくつ じごく ぜんつ ほとけ

なる。悪積もれば地獄となる、善積もれば仏となる。

によん しつと どのじや ほけきようくよう くだく

女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。法華經供養の功德かさ

りゆうによ 跡 継

ならば、あに竜女があとをつがざらん。

なんじようどののにようぼうごへんじ

317 南条殿女房御返事

ふじん しんこう

婦人と信仰 1876 ページ 7 行

みず さむ くわ こおり いちねんじゆう ゆき

およそ水は寒さが加われば氷となり、一年中とけない雪は、

とし かさ ひようけつ すいしよう

年が重なるにしたがつて氷結し、水晶のようになります。そのよ

あくぎよう つ じごく お はんたい ぜんぎよう つ ほとけ

うに、悪行を積みば地獄に堕ち、反対に善行を積みば仏となる

じよせい たにん しつと こころ

どくじゃ おそ

のです。女性は他人を嫉妬する心がかさなれば毒蛇のような恐ろ

すがた こころ も ぬし ごほんぞん くよう くどく つ かさ

しい姿や心の持ち主になり、御本尊に供養する功德が積み重なれ

りゆうによ によにんじようぶつ

ば竜女のように女人成仏していけるのです。

いにしえよりいまにいたるまで、
古 今 至 親 子 別 しゅじゅう
おやこのわかれ、主従

のわかれ、いずれかつらからざる。
辛 夫
されども、おとこ

おんなのわかれほど、
女 別 尊
たつとげなかりけるはなし。

過去遠々よりめの身となりしが、
かこおんのん 妻 み 夫
このおとこ、娑婆最後の

ぜんちしきなりけり。
善 知 識

364 持妙尼御前御返事
じみようあまごぜんごへんじ

婦人と信仰
ふじん しんこう
1970 ページ 17 行

みようしようごんのうほん

もう

こと

によにん

おん

もち

妙莊嚴王品と申すは、殊に女人の御ために用いることな

め おとこ

ほん

まつだい

およ

にようぼう

り。妻が夫をすすめたる品なり。末代に及んでも、女房

おとこ

な 変

くどく

の男をすすめんは、名こそかわりたりとも功德はただ

じようとかぶにん

淨徳夫人のごとし。

況

にようぼう

おとこ

とも

ごしんよう

とり

ふた

いおうや、これは女房も男も共に御信用あり。鳥の二

はね 具

くるま

ふた

わ 掛

なにごと

じよう

つの羽そなわり、車の二つの輪かかれり。何事が成ぜざ

てん

ち

ひ

つき

ひ 照

あめ 降

るべき。天あり地あり、日あり月あり、日てり雨ふる、

くどく

そうもくはな 咲

み 生

功德の草木花さき菓なるべし。

にちによごぜんごへんじ

ぞくろいほんとうたいい

こと

(406 日女御前御返事 (囑累品等大意の事))

婦人ふじんと信仰しんこう
2095
ページー5行